

主 題：七つのラッパが吹かれる1

聖書箇所：ヨハネの黙示録 8章7-13節

七つの封印が聖書に記されていました。その七つ目の封印が解かれました。すると、七つのラッパのさばきがその後始まります。今日、私たちが見るのは、七つのラッパのさばきのうちの最初の四つです。それが、8章の7節から最後のところに書かれています。

・第1～第4のラッパのさばき ⇒ 自然界に対するさばき

この地上や草や木、海、海の生き物、また、川、太陽、月、星、それらに災いが起こることが記されています。

・第5～第6のラッパのさばき ⇒ 人間に対するさばき

この二つのさばきを分けているのが、13節に記されている「中天を飛ぶ一羽のわしの大きな声」です。今日はそこまで見ていきます。

今話したこの神の「ラッパのさばき」は、あくまで、対象は神に逆らう人たちです。患難時代にあつて、なおも神に逆らい続けている人たちに対するさばきがここに記されているのです。患難時代に救いに与った者たちはその対象ではありません。こうして見ると、神は今の恵みの時代でもそうですが、患難時代においても、ご自身がいかにあわれみに富んだお方であるかということをお私たちに示し続けてくださっています。神は常に私たち罪人をあわれみ、そして、救いへと導こうとしておられます。Ⅱペテロ3：9で「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と教える通りです。これはこの患難時代の様々なさばきを通して教えられます。そのことを私たちは忘れてはなりません。それが私たちの神だからです。そのあわれみによって私たちは救われたのです。私たちが患難時代の人たちに比べて優っているからではありません。一方的な神の恵み、あわれみによって私たちは救いに与ったのです。あわれみの神はこの患難時代においても、そのあわれみを示していかれるのです。しかし、それなのに悲しい現実は、9章20節、21節に書かれていますが、多くの人たちは悔い改めないのです。赦しがあるのに、神があわれみをもって救いの御手を差し伸べておられるのに悔い改めません。

今日見ていく8章の箇所、その前に7章の初めのところを思い出してください。地の四方の風を強く押さえている四人の天使たちに、一人の御使いが「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけません。」という命令を発しました。神の印を押すまで害を与えてはならないと。遂に、その最後の人に神の印が押されるのです。そして、留められていたさばきがこの地に下るのです。神のさばきが下されるそのときがやって来たのです。今日は四つのラッパのさばきを見ていきます。

☆四つのラッパのさばき

7節「第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。」、ラッパの音が鳴り響きます。この後、四つのラッパを見ていきますが、それらに共通していることは、最初に神のさばきがどういうものかが記されていて、その後その結果が記されています。こういうさばきが下った、その結果、こうなったと…。このような書き方をヨハネはしているのです。

A. 第1のラッパ 7節

7節に続いて「すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。」と記されています。

1. 神のさばき 7節

「すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。」、これが神のさばきです。

1) 雹：聖書を見ると、雹は神のさばきと結びついています。皆さんは、ある出来事を思い出されたかもしれません。それは、イスラエルの民の出エジプトのとき、神はモーセとアロンを遣わされ、そして、十の災いがエジプトの地に下りました。その第7番目の災いが「雹」でした。出エジプト記9：13-25に書かれています。23節に「23 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、【主】は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。【主】はエジプトの国に雹を降らせた。」とあります。このような災いが実際にエジプトの地に起こったのです。24節にはこのように書かれています。「雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。」と、エジプトの人たちがかつて経験したことのない災いでした。その雹が大変なダメージを与えたというこ

とが25節に書かれています。「:25 雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至るまで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち砕いた。」、大変に威力のあるものだったわけです。雹によって人間も死んだし、獣も野にいるすべてのものも、植物に至るまで被害が及んだと言うのです。ところが、26節に「ただ、イスラエル人が住むゴシェンの地には、雹は降らなかった。」とあります。こうして、雹は神からの災いである、神のさばきであるということをはっきりとエジプトの人々に、また、イスラエルの人たちに明らかにしたのです。

もう少し、「雹」についての記事を旧約聖書から見ましょう。ハガイ2:17「わたしは、あなたがたを立ち枯れと黒穂病とで打ち、あなたがたの手がけた物をことごとく雹で打った。しかし、あなたがたのうちだれひとり、わたしに帰って来なかった。——【主】の御告げ——」、ヨブ38:22-23「:22 あなたは雪の倉に入ったことがあるか。雹の倉を見たことがあるか。:23 これらは苦難の時のために、いくさと戦いの日のために、わたしが押さえているのだ。」、イザヤ28:2「見よ。主は強い、強いものを持っておられる。それは、刺し通して荒れ狂う雹のあらしのようだ。激しい勢いで押し流す豪雨のようだ。主はこれを力いっぱい地に投げつける。」、

この後、ヨハネが実際に見た幻は出エジプト記に記されている出来事と対比しながら語っているようにも見えます。というのは、エジプトに捕らわれていたイスラエルの民がそこから出て行くのですが、その前に起こった十の災いと非常によく似た表現がこの黙示録に出て来るからです。

2) 火 : 二番目のさばき「火」も神のさばきと結びついています。「火」で思い出すのは「ソドムとゴモラ」のことではありませんか？創世記19:24-25「:24 そのとき、【主】はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の【主】のところから降らせ、:25 これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた。」と、「火」が降って神のさばきが下ったということです。他にも、詩篇11:6には「主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となるう。」、エゼキエル38:22にも「わたしは疫病と流血で彼に罰を下し、彼と、彼の部隊と、彼の率いる多くの国々の民の上に、豪雨や雹や火や硫黄を降り注がせる。」と書かれています。

このように「雹」や「火」は神のさばきと関連しています。

3) 血の混じった雹と火が現われ : これに関しても、旧約聖書に終わりの日の神のさばきに関する預言の中に記されています。ヨエル書2:30をご覧ください。「わたしは天と地に、不思議なしるしを現す。血と火と煙の柱である。」と。ヨエルが言ったことは「主の日」のことです。それは神のさばきのことです。

4) 地上に投げられた : そのときにこのようなことが起こると預言されていた通りに、ヨハネの告白を見ると、まさに、神のさばきがこの地に起こっていると見るのです。

結論：このような神からの災いがこの地上に起こる

実は、クリスチャンの科学者たちもこの箇所を見て、いったいどういうことが可能なのか？と、可能性について考えています。興味深いので、皆さんに紹介しておきたいのですが、ヘンリー・モーリス博士はクリエーション・リサーチという団体を始めた一人の科学者で、彼は水文学と地質学の専門家です。彼は二つの可能性を言います。

(1) 「火山噴火」による可能性 : このことはこれまでもこの黙示録の中に見て来ました。今、この日本では地震が大変多いです。専門家たちはこう言います。「東日本大震災という大きな地震があって、それによって日本中の火山活動が誘発されている。」と。私たちはそのことを経験しています。モーリス博士はこう言います。「ここに記されていることは、恐らく、火口から空中へと吹き上げられた大量の水蒸気が激しい上昇気流の中で雹として凝結する。そして、燃える溶岩がそれらとともに地上に降り注ぐ。その光景ではないか？」と。十分考えられることです。でも、証明のしようがないのです。みことばを見て、恐らく、こういうことではないか？とモーリス博士は言います。ただ、ここに記されているように「血の混じった雹」と、それはどんなものか？モーリス博士は「これは人間や動物の血が混じっている。もしくは、雹に血の赤味に似た埃やガスが含まれていてそのように見えるのではないか？」とそのように言っています。パークレーという神学者は、1901年にイタリアとヨーロッパ南東一帯に降ったと言われる赤い雨のことを挙げて実際にあったことだと言います。なぜ、赤い雨が降ったのか？実は、サハラ砂漠から細かい赤い砂が空の上層部に吹き上げられその粒子が雨に混じって地に落ちた。それを見た人々はまさに血の雨が降ったようだというのです。ですから、この「血の混じった雹」とはこのような可能性があるということです。

(2) 「彗星」による可能性 : もう一つ、この科学者が挙げるのは「彗星」のことではないかと言います。驚くことは、この後に出て来るのは、確かに、彗星や隕石を用いて神がさばきを下しているに見えることです。ですから、ここで「彗星」のことだとしてもそれほど違和感はないのです。モーリス博士はこう言います。「無数の彗星の軌道を少し変えるだけで地球にぶつかることにもなる。」と。

皆さんにご紹介したこれらをことは、あくまでも科学者たちが見る可能性のことです。

2. その結果

でも、確かに聖書が教えているのは、このような「血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。」ということで、その結果、何が起こったのか？見ましょう。三つのことが書かれています。植物への災いがここに記されています。全世界のことです。

1) 地上の1/3が焼けた

2) 木の1/3が焼けた

3) 青草が全部焼けた

ところが、9章4節を見ると「そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、…」と書かれています。ある人たちは疑問に思います。8：7では「すべての青草が焼けた」のになぜここに「青草」と書かれているのか？と。つまり、こういうことです。今、私たちが見ているのは第1のラッパが吹き鳴らされて第1のさばきが起こったことです。それから、9：4に記されている第5の御使いがラッパが吹き鳴らすまで時間があるということです。このラッパのさばきは3年半の間の出来事です。ですから、最初のさばきで青草が全部焼けてしまっても、その後にもまた生えて来ます。そのことをヨハネは言っているのでしょうか。

ですから、第1のラッパのさばきは植物への災いとして、この地球上にこのようなことが起こると言うのです。

B. 第2のラッパ 8, 9節

1. 神のさばき 8 a 節

「:8 第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。」と、これが神のさばきです。今度のさばきはこの地上にではなく海に関連したさばきであることが書かれています。何か大きな物体が海に落ちると言うことです。では、この「大きな山のようなもの」と記されているものは何でしょう？これは「山」ではありません。なぜなら、「山のようなもの」と書かれているからです。巨大なものだったのでしょう。しかも、それは「火の燃えている」物体だと言います。いったい何なのでしょう？先ほど紹介したモーリス博士はこう言います。「大きな山のようなものが地球に向かって進んでいる。そして、それが大気圏に突入した際にその物体が火で覆われている。これが自然科学的説明として一番であろう。」と。あくまで、これも可能性です。でも、ここでヨハネが見て描写していることはこういうことではないかと言うのです。

ということは、もしかすると、この8節に書かれている「火の燃えている大きな山のようなもの」とは、非常に大きな隕石か小惑星である可能性があります。地球に突入してそれが赤く燃えて海に落ちていくと。どこの海とは記されていませんが、海は繋がっています。間違いなく、どこに落ちたとしても、海全体に甚大な被害が生じるということです。そのことがここに書かれているのです。

隕石が落ちて来る…、いろいろと調べると、隕石は毎日のように落ちて来ているようです。1908年6月30日に、巨大な隕石がシベリアの地に落ちたと、まだ、それはミステリーと言われているようですが、ロシアの国営テレビが特集を組んだりしています。それを見ると、直径100m程の隕石が地球の大気圏に突入し、シベリアのツングース上空8キロ位のところで爆発したと言います。そのとき、その爆心地から巨大な火柱がそそり立ち、煤煙は上空20キロに達した、大変大きな爆発だったと。爆心地から20キロ以内は炎に包まれ、すべての森林を焼き尽くした。二百万本の樹木をなぎ倒し、数千頭のトナカイが死んだと言います。これは「イングスーカ大隕石」という名が付いています。驚くことは、この隕石が爆発することによって放出したエネルギーはTNT火薬の20メガトン、2000万トン、実は、これは広島に投下された原子爆弾の千倍の威力があったと言います。

これはシベリアだったからまだよかった、もし、東京上空で爆発したならどうなるか？シュミレーションがあります。関東平野が全滅する。もし、都市に落ちたら100万人、人口密集地帯なら500万人が死亡するであろうと。今、話していることは、8節に書かれているのは「隕石」のことかもしれないということです。わずか直径100mでもこれだけの甚大な被害をもたらすと人々は言います。「火の燃えている大きな山のようなもの」が海に落ちるのです。

2. その結果 8 b、9節

その結果、何が起こるのか？8節の終わりから9節に「そして海の三分の一が血となった。:9 すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。」と書かれています。

1) 海の1/3が地になった

2) 海の中の1/3の生き物が死んだ

3) 舟の1/3が破壊された

どれほど大きなものだったか？「大きな山のようなもの」が海に落ちることによって、海の中の生き物

の1/3が死ぬのです。恐らく、それゆえに、8節の後半に見るように「海の三分の一が血となった」のです。生き物が死んだからです。もちろん、神はそのようなものを使わずに海を血に変えることができます。モーセとアロンはナイル川の水を血に変えました。出エジプト記7：20-21に書かれている出来事です。「:20 モーセとアロンは【主】が命じられたとおりに行った。彼はパロとその家臣の目の前で杖を上げ、ナイルの水を打った。すると、ナイルの水はことごとく血に変わった。:21 ナイルの魚は死に、ナイルは臭くなり、エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなった。エジプト全土にわたって血があった。」と。神はこのようなことをこれまでも為されたしこれから為すことができます。でも、もし、100mを超えるような大きな隕石が落ちるなら、このような甚大な被害が世界的に及ぶと、そういうことを研究している人がいるということです。

また、船の1/3が破壊されることが書かれています。これは説明するまでもありません。我々は非常に悲しい出来事を目撃しました。あの津波です。船舶だけではなく。どれだけの被害を蒙ったことか？津波の力に対して人間は何もすることができなかつたのです。今、私たちが聖書を通して見ている出来事は、それよりもはるかに大きな力です。全世界の海に影響を及ぼすのです。ですから、航行中の船や停泊中の船もあったでしょう。恐らく、津波によってそれらが破壊されてしまう、それ程の大惨事が起こるといえることです。これが第2番目のラッパが吹き鳴らされたときに起こる神のさばきとその結果です。

C. 第3のラッパ 10, 11節

1. 神のさばき 10節

「:10 第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、…」、第3のラッパが吹き鳴らされると、「たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちてくる」と言います。先ほどは人類が「海への災い」を経験したことを見ました。それからまだ回復していないときに、もう次の災いが襲って来るのです。つい最近、私は東日本にいましたが、被災地はまだまだ回復していません。もう4年も経っているのに…。このすべての出来事は3年半の間に起こるのです。しかも、もっと全世界的な規模によって大変な災いが起こり海に被害が生じるのです。そのダメージからまだ回復する間もなく、次のダメージ、災いが襲って来ると言うのです。

*まだ、人類が海の災いから回復する前に、今度は川への災いが起こった

その物体がどこに落ちるのか？「川々の三分の一とその水源に落ちた。」と書かれています。この「たいまつのように燃えている大きな星」とはいったい何でしょう？「ここに記されている星とは太陽と月以外の天体だ」とジョン・マッカーサー先生は言います。その根拠は、実は、この「たいまつ」ということばは古代においては流星や彗星を説明するために用いられたことばだからです。そのようなものがこの地球に落ちて来る、しかも、その落ちる場所は川や水源、泉であると言うのです。

2. その結果 11節

「:11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人々が死んだ。」「苦よもぎ」とは何でしょう？ヨーロッパでは古くから虫を駆除する薬として駆虫剤や薬用に使われたと言われています。日本では江戸末期から明治初頭に渡来して、乾燥させた葉を駆虫剤などに利用してきたと専門家が言っています。「苦よもぎ」ということばは聖書の中に10回出て来ます。8回は旧約聖書に2回が新約聖書で、その2回が今見ているこの黙示録8章に出て来ます。 * 「苦よもぎ」ということばは、悪や災いと関連して用いられている

申命記29：18「万が一にも、あなたがたのうちに、きょう、その心が私たちの神、【主】を離れて、これらの異邦の民の神々に行って、仕えるような、男や女、氏族や部族があつてはならない。あなたがたのうちに、毒草や、苦よもぎを生ずる根があつてはならない。」、悪を生み出すものがあつてはならないという大変大切な戒めです。私たちの心の中に悪意があつたり、怒りがあつて、それらを私たちが温存しているなら、それらは良くない行いをもたらしていくということです。モーセは人々に言うのです。「あなたがたの心の中にもし「毒草や苦よもぎを生ずる根」が、そのようなものがあるなら、そこから悪が出て来る、それを除きなさい。」と。

箴言5：4「しかし、その終わりは苦よもぎのように苦く、もろ刃の剣のように鋭い。」

エレミヤ9：15「それゆえ、イスラエルの神、万軍の【主】は、こう仰せられる。「見よ。わたしは、この民に、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。」

エレミヤ23：15「それゆえ、万軍の【主】は、預言者たちについて、こう仰せられる。「見よ。わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がったからだ。」

哀歌3：15「主は私を苦味で飽き足らせ、苦よもぎで私を酔わせ、」

哀歌3：19「私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。」

アモス5：7「彼らは公義を苦よもぎに変え、正義を地に投げ捨てている。」

アモス6：12「馬は岩の上を走るだろうか。人は牛で海を耕すだろうか。あなたがたは、公義を毒に変え、正義の実を苦よもぎに変えた。」、悪に変えたということです。

ですから、この「苦よもぎ」ということばは「悪、また、様々な災い」と関連していることが分かります。

テキストに戻って、彗星か隕石か分かりませんが、燃えている大きな星が川々に、また、その水源に落ちるとあり、その結果、この地球が「苦よもぎ」と呼ばれるように、地球の水が、川の水の1/3が非常に苦いものになったということです。11節の後半に「…水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。」とあります。「少し苦かった!」というようなものではないのでしょうか。結果的に、その水を飲むことによっていのちを落とす人たちがいる、それ程水が汚染されてしまうということです。世界中の川の1/3が、そして、数々の泉にこのような物体が落ちて、その結果、その水を飲んだ人たちの多くが死ぬということです。これが第3のラッパのさばきとして記されていることです。

恐らく、この三つのさばきを見ただけで、大変なことがこの地球上に起こることが分かります。地球全体も1/3が焼けてしまう、植物もダメージを受け、海もやられてしまう。海の中の生き物の1/3が死んでしまう。海の1/3が血の色に変わってしまいます。そして、今度はその真水までも…、私たちが飲料水として使っている川や泉までも汚染されてしまう。皆さん、思いませんか？何となく私たちは「これらは過去のこと」と見てしまうのですが、これは「未来のこと」です。

そうすると、間違いないことは、こういうニュースは世界を駆け巡ります。テレビやインターネットを通して「このようなことが起こりました。このようなことが起こっています。」と世界中から同じような情報が流れて来るはずで、今でもそうでしょうか？ロシアの飛行機が落ちたというと、そのニュースはもう世界中に流れます。そして、いろいろなことが分かっています。その写真が出て情報がどんどん流れていきます。ですから、今見ているこのようなことも間違いなく一瞬にして世界中に流れます。「〇〇の川で、〇〇の海で…このことが起こった。こういう被害があった。今起こっている。」と。そのような中を人々は生きるのです。大変な時代です。自然界にこのような災いが訪れた、恐らく、これらのことを人々はライブで見ているのです。そういう時代のことを言っているのです。

D. 第4のラッパ 12節

1. 神のさばき

「:12 第四の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、…」第4のラッパのさばきとは、このように「天体が打たれる」と言います。この「打つ」ということばが強調していることは、太陽を打った場合にもたらされる被害です。「太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、」と、それによってもたらされる大変な被害を強調しているのです。神によって、太陽、月、多くの星が大変な被害を受けるということです。

2. その結果

さて、何が起こるのか？その結果を見ましょう。「三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。」と。この世界は暗くなるということです。光が今の1/3になるのです、昼間も夜も。神は確かに、エジプトに災いをもたらしたときに、暗やみを送ったことがありました。十の災いの中の第9番目の災いです。それは光のない世界で大変だった様子が出エジプト記10章に書かれています。

10：22にこのように記されています。「モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプト全土は三日間真っ暗やみとなった。」と。その時もそうでした。エジプトの人たちは真っ暗やみの中にいました。光の全くない世界でした。ところが、イスラエルの人々のところだけは光があったのです。そうして神は、これは偶然に起こっているのではない、普通の自然現象ではない、神によるさばきだということを明らかにしたのです。このすべての出来事の背後に創造主なる神がおられることを明らかにしていたのです。エジプトの暗やみは三日間で終わりましたが、この暗やみはそうではなさそうです。今の1/3も暗くなると言います。

暗くなるだけでしょうか？考えてください。太陽が今よりも1/3暗くなってしまいうことは、間違いなく、気温にも影響を及ぼします。恐らく、気温の寒冷化が全世界的に起こっていきます。今よりもより寒くなるということです。このことがここに記されているのですが、実は、あの預言者イザヤもよく似たことを預言しています。イザヤ書13：9-11、ここに「主の日」ということばが出て来ます。神のさばきのことです。イザヤはこのように預言しています。「:9「見よ。【主】の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。:10 天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。」、どうして、このようなことが起こるのか？11節を見てください。「わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。」と、神のさばきだと言います。神のさばきによつ

て、こうして星も太陽も月も光を放たないと。

イエスもこれによく似たことを言われていることが、マルコの福音書に書かれています。「終わりの日」のことです。13:24, 25「:24 だが、その日には、その苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たず、:25 星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。」、そして、「人の子が帰って来る」ということです。26節「:26 そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」と。イエスがこの地上に帰って来られる前にこのようなことが起こるとイエスは言われたのです。今、私たちは黙示録でそのことを見ているのです。太陽も月も星も光が1/3になる。暗くなるだけでなく、大変な寒さがこの地球を襲うということです。

こうして、4つのラッパのさばきがどのようなものか、どのような結果をもたらすのかということを見て来ました。8:13に「また私は見た。」ということばが記されています。ヨハネはまた新しい幻を見ているのです。この四つのさばきを見ただけでない、その四つ目のさばきがあった後、彼はまたある幻を見るのです。 *ヨハネは、天に飛ぶ一羽のわしを見る

13節「…一羽のわしが中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわざ来る。わざわざ、わざわざ来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」と、ヨハネは一羽のわしが「大声で言うのを聞いた」とあります、この「聞いた」という動詞は「それを事実としてはっきりと耳にする」ということです。そして、「一羽のわしが中天を飛びながら、」とあります。「中天」とは「空の一番高いところ」を指します。ちょうど、真昼に太陽が昇るところです。別の言い方をすれば、天の中心であって、そこにあることによってあらゆる人々の目に留まって、すべての人がそれを見ることができ、また、そこから発せられることばがすべての人に届くと、そういうことです。

この一羽のわしが何を言っているのか？「わざわざ来る。わざわざ来る。わざわざ来る。地に住む人々に。」です。初めにも話したように、神のさばきが神を信じないで逆らっている者たちに下るということです。ですから、この「地に住む人々」とは、救いを拒み続け逆らい続けている人たちのことです。神の為さるみわざを見て、このような災いが神から来ていることを見ても、人々はそれでも信じないということを見ました。そのような人たちに対する警告です。

「わざわざ来る。わざわざ来る。わざわざ来る。」と三度繰り返しているのは、この後に三つのさばきが続いているからでしょう。神からの、しかも、大変な災いがこの後待ち受けていると言うのです。この光景を思い浮かべてください。ヨハネは四つのさばきを見ました。この地球上に大変な災いが訪れて、地上も自然界も海も川も泉も、大変な被害を蒙りました。そして、空を見上げたら、昼間であっても太陽が今までの1/3の明るさしかない。そのために、大変寒い状態がこの地球に訪れるのです。その光景を見たときに、一瞬の静寂があるように、そして、一羽のわしが飛んでいるのです。中天にあってそのわしは大きな声で叫ぶのです。そのメッセージは「わざわざ来る。わざわざ来る。わざわざ来る。」。それを思い浮かべるだけで背筋が凍る思いがしませんか？恐ろしさを感じて、震えを覚えるような…。

この後、大変なさばきが訪れるのです。まさに、その訪れを告げるこのわしの声、これも神の一つのあわれみでしょう。こうして警告のメッセージを人々に発するのです。なぜなら、神の望みは一人でも多くの罪人が悔い改めることだからです。必ず、さばきがやって来ると。これまでのさばきも大変でした。人類がかつて経験したことのないような大変なさばきがこの地上に、また、天に起こりました。それに優るさばきがこの後起こっていくと言います。そうして、神は罪人に悔い改めを促すのです。でも、悲しい現実、その現実を見ても、神の声を聞いても、多くの罪人は神の前に心を開くことなくこの救いを受け入れようとしないのです。

人間の問題が分かるでしょう？皆さん！人間は神を信じたくないのです。自分の思い通りに生きていきたいのです。ですから、神があわれみをもって様々なことをもって目を覚まさせそうとしても、人間は自分のやりたいことを選択していかうとするのです。でも、あなたや私の目が開かれたのは、あなたや私がそのような人たちに比べて優っているからではありませんでした。すべて神の恵みでした。神が目目を覚まさせてくださった、神が自分の罪深さを示してくださった。本当の自分の罪深さを、救いが必要であることを、自分ではこの救いを得ることができないことを、そして、その神が私たちを救いへと導いてくださったのです。そのことが、私たちの愛する人たちの上に起こることを私たちは期待します。私たちの愛する家族の中に、友人の中に、この主を知らない、救いを受け入れていない人がたくさんいるのです。彼らがこの救いに与ることを期待します。

そのためにも皆さん！私たちはこの聖書の真理をしっかりと知って、こういうことを神は警告されているゆえに、その警告を私たちが発することです。いつ起こるのかは分かりません。でも、何が起こるのか？そして、それが確実に起こることは分かっています。私たちには大きな責任があります。祈りをもってこのすばらしい救い主を、この救いのメッセージを語り続けていくことです。

次回、私たちはその後続いていく大変なさばきを見ていきます。どうぞ、この1週間、皆さんひとり

一人が置かれているところで、神のすばらしい救いのメッセージを語り続けてくださることを心から願います。

《考えましょう》

1. 第1から第4のラッパのさばきを説明してください。
2. 中天においてわしは何を大声で叫んでいましたか？
3. さばきの警告はだれに対するものですか？
4. このような災いが下っていながら、罪人が悔い改めないのはどうしてだと思えますか？